

城山遺跡Ⅱ

—第2地点の調査—

2012

本庄市教育委員会

序

本庄市は、かつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一誕生の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土を持つ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書は本庄市本庄3丁目に所在する城山遺跡の発掘調査成果を記録した報告書です。城山遺跡は本庄台地の北縁部に立地する古墳時代中期から平安時代にかけての中核的な集落跡として著名ですが、今回の調査でも、平安時代の竪穴住居跡が1軒検出されました。竪穴住居跡には当時の炊事や食事に使われていた甕や坏などの土師器が残されていました。また、網のおもりとして使われた土錘も数多く発見されました。これらは、本庄台地の下を流れる元小山川での漁労に用いられたものと考えられ、当時の生業を窺い知るうえで重要な資料といえます。

本書に報告したような貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、歴史を明らかにすることはよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解を賜りました株式会社横尾材木店をはじめ、調査に際してご指導、ご協力を頂きました方々、直接作業の労にあたられた皆様に衷心よりの感謝を申し上げます。

平成24年3月

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市本庄三丁目 1603-22 に所在する城山遺跡（県遺跡No. 53-159）第 2 地点の発掘調査報告書である。
2. 調査地点の名称については、本報告東側において平成 17 年 1 月 12 日～1 月 20 日にわたり発掘調査が実施されていることから、本調査地点を城山遺跡第 2 地点と称する。
3. 発掘調査は、株式会社 横尾材木店（代表取締役 横尾 守氏）による分譲宅地造成に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施したものである。
4. 発掘調査は、城山遺跡の 42.1㎡を対象として実施した。
5. 発掘調査の期間は、以下のとおりである。
自 平成 23 年 7 月 4 日
至 平成 23 年 7 月 21 日
6. 発掘調査担当者は、本庄市文化財保護課太田博之・大熊季広・的野善行があたり、発掘調査には株式会社 測研水谷貴之が調査員として専従した。
7. 整理調査の期間は、以下のとおりである。
自 平成 23 年 10 月 17 日
至 平成 24 年 1 月 31 日
8. 報告書刊行のための整理作業及び報告書作成作業は、株式会社測研埼玉支店ほんじょう事務所に委託した。
9. 本書の執筆は I を本庄市教育委員会文化財保護課が、II～V を株式会社測研水谷貴之が担当し、編集は水谷が担当した。
10. 発掘作業及び本書作成にあたって、下記の方々や諸調査機関よりご助言ご協力を賜った。記し感謝いたします。
金子 彰男 坂本 和俊 外尾 常人 田村 誠 中沢 良一 丸山 修 矢内 勲
11. 本書に関する資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。
12. 本報の発掘調査、整理調査および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

発掘調査、整理・報告書刊行組織（平成 23 年度）

体者	本 庄 市 教 育 委 員 会	
	教 育 長	茂木 孝彦
事務局	事 務 局 長	関和 成昭
	文 化 財 保 護 課	金井 孝夫
	副 参 事 兼 課 長 補 佐	鈴木 徳雄
	課長補佐兼埋蔵文化財係長	太田 博之
	主 幹	恋河内昭彦
	主 査	大熊 季広
	主 査	松澤 浩一
	主 任	松本 完
	臨 時 職 員	的野 善行

凡 例

1. 本書所収の遺跡全測図・各遺構図における方位針は、座標北を示す。
2. 本書所収の地図のうち第1図は、国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」（平成10年発行）をもとに、また第2図は1/2500「本庄市都市計画図12」（平成10年測量）をもとに加筆・作成した。
3. 本報告書の図中における各種遺構の略号は、下記のとおりである。
SI…竪穴住居跡 SK…土坑 SX…性格不明遺構 P…ピット
4. 本報告書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に下記のとおりである。

〔遺構図〕	〔遺物図〕
竪穴住居跡……1/60	土器・陶磁器……1/4
//貯蔵穴……1/60	埴輪……1/4
性格不明遺構……1/60	土錘……1/3
ピット……1/60	粘土塊……1/3
5. 遺構断面図の水準数字は海拔高度を示し、その単位はmである。
6. 遺構断面図中のスクリーントーンは地山を示す。
7. 観察表中におけるNo.欄における数値は、各出土遺物中の番号ならびに各遺物出土状況図中の番号、遺物写真図版中の番号に、それぞれ対応している。

目 次

序

例言・凡例・目次

I. 発掘調査に至る経緯	1
II. 遺跡の環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III. 調査の方法と経過	2
1. 調査の方法	2
2. 調査の経過	2
IV. 調査の成果	4
1. 遺跡の概要	4
2. 検出した遺構	4
(1)竪穴住居跡	4
(2)性格不明遺構	4
(3)ピット	4
V. まとめ	8
1. 古墳～平安時代の集落について	8
2. 本庄城跡について	8

写真図版

報告書抄録

奥付

I. 発掘調査に至る経緯

平成 23 年 5 月 9 日、株式会社横尾材木店 代表取締役横尾守氏より本庄市本庄三丁目 1603 番地 22 の土地、1451.5㎡に宅地造成工事の計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 城山遺跡（県遺跡番号 53-159）が存在することが判明した。

城山遺跡 (No.53-159) の包蔵地範囲内では、過去に 2 度の発掘調査が行われ、古墳時代～平安時代の竪穴住居跡が多く検出されている。また、隣接する本庄城跡 (No.53-016) は中世～近世にかけての城跡として知られており、照会地においてもその関連遺構が存在する可能性が考えられた。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保護のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成 23 年 5 月 17 日～5 月 19 日まで現地調査を実施した。その結果、敷地西側の大部分は過去の建物等により大きく攪乱されており、埋蔵文化財は検出されなかった。敷地東側については部分的に攪乱はされているものの、竪穴住居跡 2 軒および土坑など複数の遺構を検出した。

本庄市教育委員会は、以上の試掘調査の成果に基づき『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、1. 協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡が存在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定により、『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3. 『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後、株式会社横尾材木店と本庄市教育委員会は、先の試掘調査結果等をふまえ、数度にわたり協議し、埋蔵文化財が現状で保存できるよう調整を行った。宅地予定部分では盛土等の措置により埋蔵文化財の現状保存が可能となったが、区画道路予定部分で検出された竪穴住居跡 1 軒等に関しては、設計変更による現状保存は不可能であるとの結論に達し、当該部分に関してはやむを得ず発掘調査を実施し記録保存することとなった。

平成 23 年 5 月 9 日付けで、株式会社横尾材木店 代表取締役横尾守氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会では、同届出を平成 23 年 6 月 14 日付本教文発第 125 号で埼玉県教育委員会あてに進達し、また平成 23 年 7 月 21 日付け本教文発第 160 号で本庄市教育委員会教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会教育長に提出された。平成 23 年 8 月 18 日付け教生文第 5-557 号で埼玉県教育委員会より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。

(本庄市教育委員会事務局)

Ⅱ. 遺跡の環境

1. 地理的環境

城山遺跡の所在する本庄市は、埼玉県の北西部に位置する。市域の形状は北東から南西方向へと長く、その地形は北東から順に、低地・台地・丘陵・山地に大別することができる。市域北縁の低地部には利根川が流れており、これを挟んで対岸の群馬県と接している。

本遺跡は本庄市街地にあり、この付近は本庄台地の北縁部にあたる。本庄台地は神流川扇状地の一部をなす低台地であり、台地北縁部は烏川などの浸食によって、比高差 4～12m の崖線を形成している。これが本庄段丘崖であり、現在、この崖下には元小山川が流路を東へ向けて流れている。

本遺跡の標高は 53m 前後を測り、JR 高崎線本庄駅から約 650m 北側に位置する。さらに北側の本庄市役所とは指呼の位置関係にあり、東には細い路地をはさんで円心寺が隣接している。市役所の北隣は本庄段丘崖になっており、本遺跡は本庄台地の北側縁辺部付近に占地する。

2. 歴史的環境

本庄台地では多くの遺跡の存在が知られており、それらの時代・内容も多岐にわたる。発掘調査された遺跡は台地縁辺部に多い傾向がみられるが、市街地内での具体相は不明瞭な部分がある。本遺跡周辺では本庄城跡（3）や城山遺跡第 1 地点（2）の調査事例があり、古墳～平安時代にかけての集落が調査されている。いずれも本遺跡の至近に位置しており、検出した竪穴住居跡の時代幅はあるものの、同一集落とみなすことができよう。他にやや離れて天神林遺跡（4）や天神林Ⅱ遺跡（5）、薬師堂遺跡（6）や薬師堂東遺跡（7）などがあり、本庄台地縁辺に営まれた集落の一端を知ることができる。

一方、本遺跡周辺には本庄城が存在したとされている。本庄城は中世後期の本庄宮内少輔実忠による前期本庄城と、近世初頭の小笠原掃部大夫信嶺による後期本庄城があると考えられており、本遺跡は後期本庄城跡の比定地に相当する。しかし、前・後期本庄城ともにその実態は不明瞭であり、後期本庄城の解明が期待された本庄城跡の発掘調査でも関連遺構の検出は多くなく、今後の実態解明に課題を残している。

Ⅲ. 調査の方法と経過

1. 調査の方法

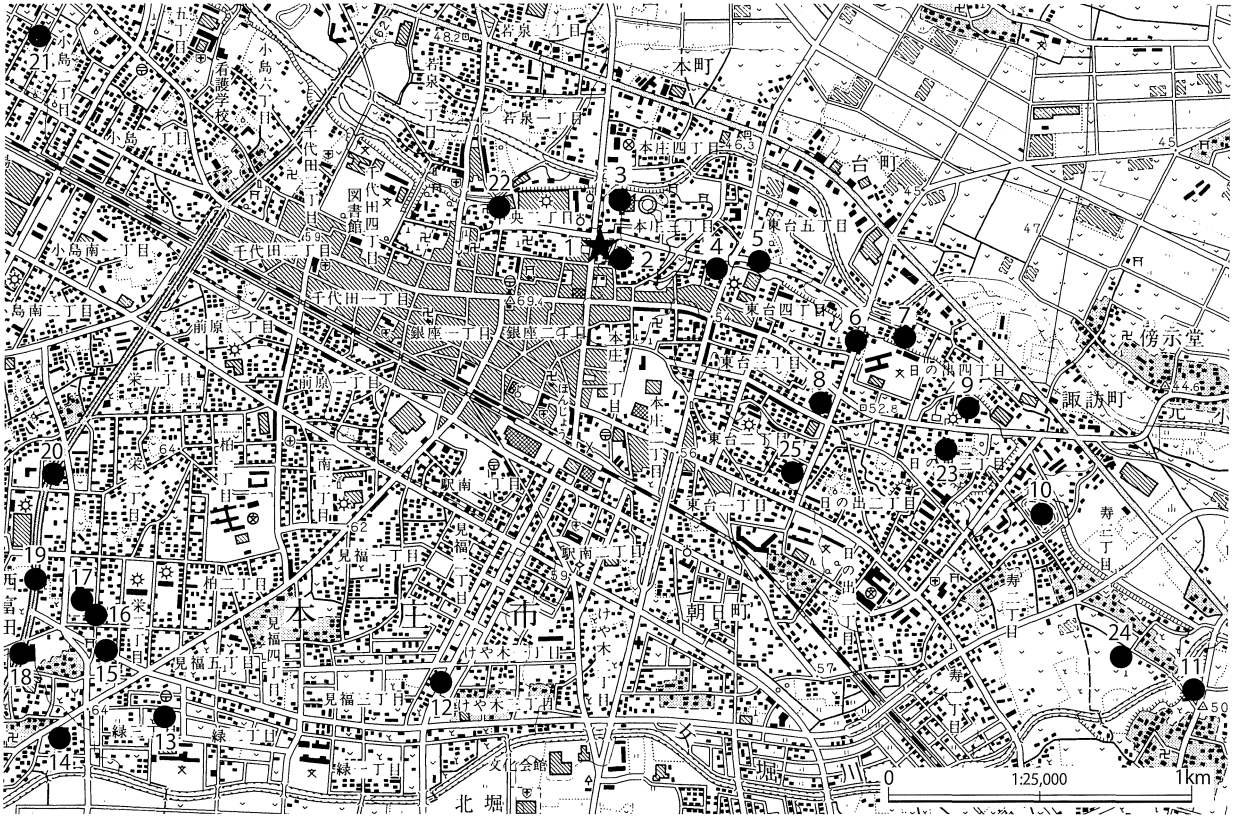
表土掘削には重機を使用し、試掘調査の所見により基本土層 2 層面を遺構確認面とした。その後人力による遺構確認を経て、個別遺構の調査を行った。遺構の掘り下げはセクションベルトを残し、遺物の出土位置に留意して行った。遺構番号は城山遺跡第 1 地点からの通番とした。土坑の掘り下げは行わず、これは隣接する円心寺に関わる歴代の墓坑の可能性に配慮したためであるが、その可能性のない規模のピットは掘り下げを行った。

遺構の記録は断面図を手取りで作成し、平面図はデジタル測量で作成した。写真記録は 35mm 一眼レフカメラを用いてモノクロフィルムで撮影し、さらに同一カットをデジタル一眼レフカメラで撮影した。

整理調査時の遺物注記は、出土遺構・出土位置などを書き込み、「第 2 地点」を明記した。

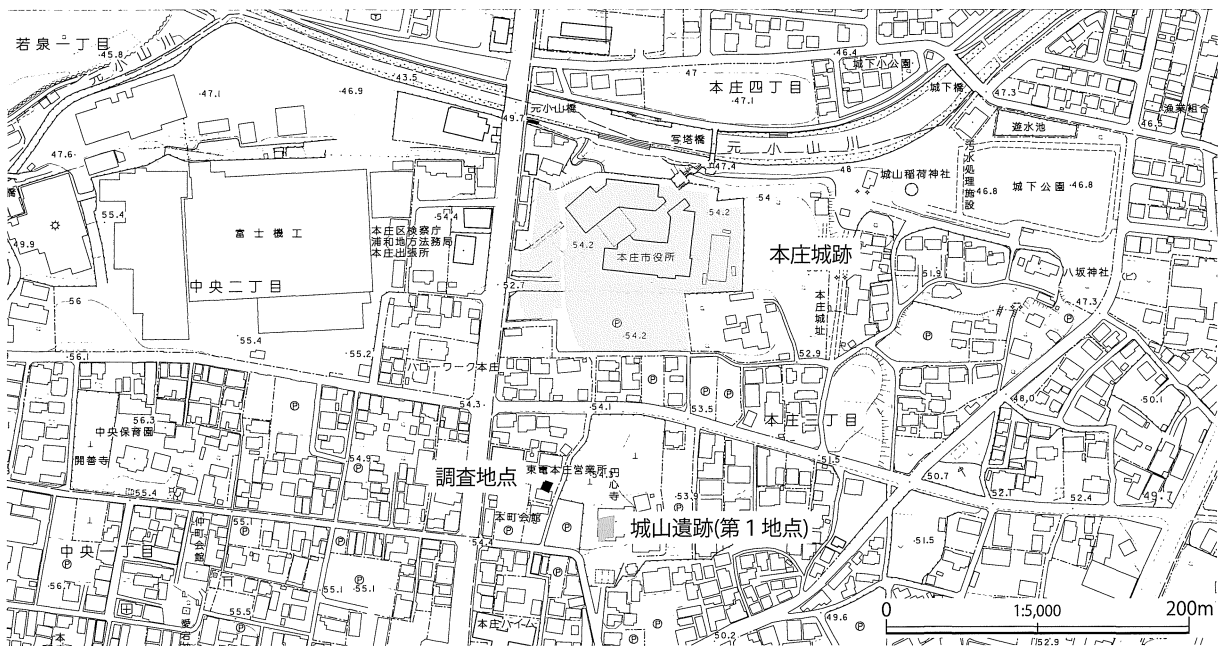
2. 調査の経過

平成 23 年 7 月 4 日：発掘器材準備。表土掘削開始、即日終了。5 日：遺構確認作業。攪乱掘削。遺構調査開始。6～8 日：SI-3・SX-2 調査継続。11 日：SI-3 土層断面図作成、終了後完掘。SX-2 調査継続。12 日：SK-2 調査継続。13 日：SX-2 土層断面図作成、終了後完掘。ピット調査。14 日：各遺構全景写真、および調査区全景写真撮影。15～18 日：天候不順のため作業中止日あり。19 日：遺構平面測量。出土遺物取り上げ。SI-3 掘り方のトレンチ調査。21 日：SI-3 掘り方調査。諸記録の補足と残務整理。発掘器材を撤収し、発掘調査終了。



- 1城山遺跡Ⅱ 2城山遺跡 3本庄城跡 4天神林遺跡 5天神林Ⅱ遺跡 6薬師堂遺跡 7薬師堂東遺跡 8本庄飯玉遺跡 9御堂坂遺跡
 10諏訪新田遺跡 11東五十子赤坂遺跡 12笠ヶ谷戸遺跡 13雌濠遺跡 14本郷遺跡 15南大通り線内遺跡 16薬師元屋舗遺跡 17薬師遺跡 18社具路遺跡 19夏目遺跡 20二本松遺跡 21旭・小島古墳群 22北原古墳群 23御堂坂古墳群 24鶴森古墳群 25塚合古墳群

第 1 図 周辺の遺跡図



第 2 図 調査区位置図

IV. 調査の成果

1. 遺跡の概要

今回の調査面積は約 42.1㎡であり、造成土直下の基本土層 2 層面を遺構確認面とした。局所的に深い攪乱が存在したが、竪穴住居跡 1 軒・性格不明遺構 1 基・ピット 4 基を検出した。他に土坑 1 基の平面プランを確認したが、第Ⅲ章に記したように、掘り下げは行っていない。各遺構の遺構番号は城山遺跡（第 1 地点）からの通番とした。なお、今回の調査面積は狭小なこともあり、本報告書では全体図と遺構図を兼ねて掲載した。

2. 検出した遺構

(1) 竪穴住居跡

SI-3

平面形態は長方形状と考えられるが、SX-2 により東側を壊されているため、東壁は全く遺存しない。検出した規模は、南北長 4.4m・東西長 3.1m（残存）・深さ 27cm 程度である。覆土は全層的に締まりが強く粘性があるが、締まりの強さは上層位の造成土填圧に起因すると思われる。また、覆土中には焼土を含む層があるが、炭化物や炭化材は含まれておらず、焼失住居跡の可能性は低いと考えられる。床面はほぼ平坦で硬化が強く、壁際には幅 17cm・深さ 10cm 前後の周溝が廻る。カマドは確認できないが、東壁に付設されていたと考えられ、SX-2 によって滅失したのであろう。本遺構の南東隅部分では楕円形状の小規模な掘り込みがあり、これを貯蔵穴の残痕として判断した。掘り方の確認はトレンチによって行い、床面下 4～24cm 程度の掘り込みが認められた。比較的起伏が多い状況であり、南壁付近では床下土坑状の落ち込みも存在した。

出土遺物は多くないが、覆土中より土師器環・甕の破片を主体として出土した。須恵器では甕の小破片がわずかに出土しており、他に土錘や粘土塊も出土した。土錘のうち 1 点は床面からの出土である。

本遺構の帰属時期は、出土遺物の様相からみて平安時代前半と判断した。

(2) 性格不明遺構

SX-2

平面形態は不整形で、東・南側が調査区外になるため全形は不明である。あるいは長方形状の大規模土坑の可能性もある。検出した規模は、南北 5.9m（残存）・東西 3.7m（残存）・深さ 65～79cm 程度である。底面は比較的平坦ながらも緩やかな起伏がある。北西隅部分では円形土坑状の窪みが 2ヶ所認められ、南側部分では歪んだ楕円形状の落ち込みも存在した。また、調査区東壁際に設定したサブトレンチでは、底面がさらに東側方向へと深くなる状況を確認している。本遺構は SI-3 と重複するが、それよりも新しい。

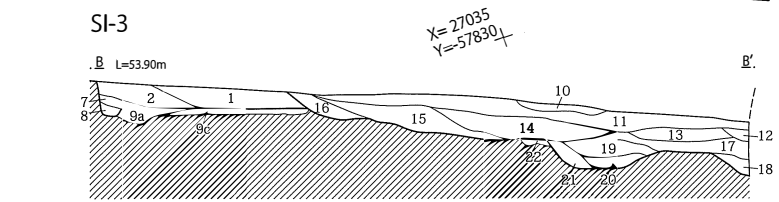
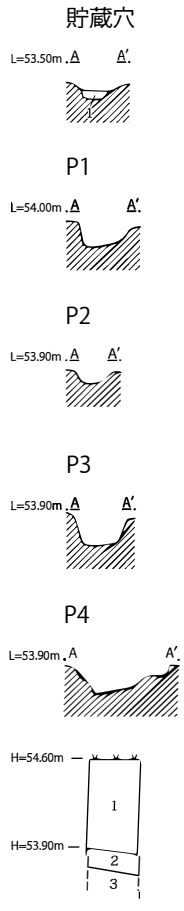
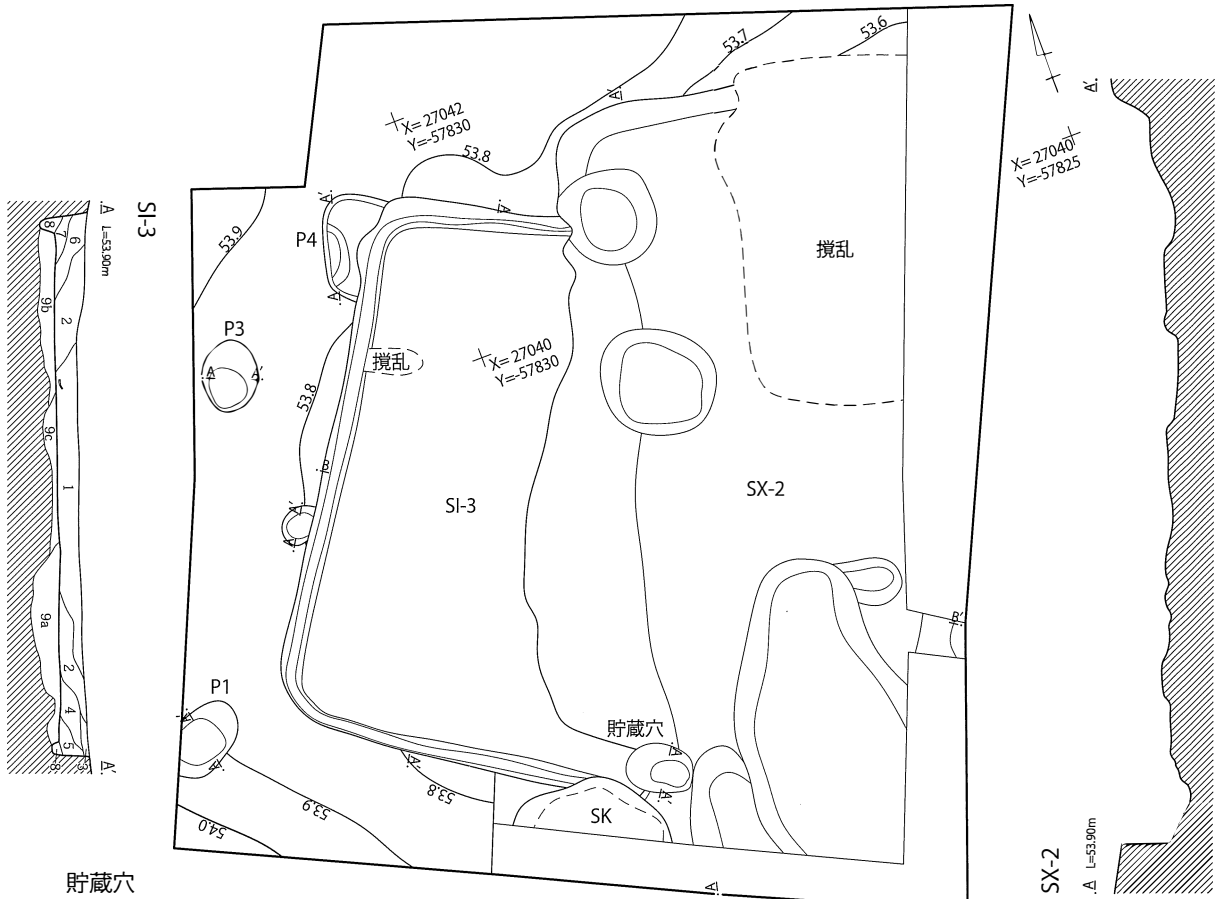
出土遺物の主体は近世～近・現代の帰属である。陶磁器類を中心として、在地産土器の破片も含まれる。明らかな中世段階の遺物は認められず、江戸時代後期～大正時代あたりまでの遺物が主体である。一方、古代の遺物も出土しており、これらは流れ込みと判断できる。土師器高環の破片や土錘の他、埴輪の小破片が出土している。

本遺構の帰属時期は、出土遺物の様相からみて近世後期～近・現代である。覆土に人為的な埋め戻しの状況が認められないことから、最終的な埋没時期を近・現代と考えておきたい。当初の開掘時期は不明瞭ながら、近世後期まで遡る可能性もあろうか。

(3) ピット

P-1～4

4 基のピットを検出した。これらは明確な配列状態に無いことから、相互に関連しないピットと考えられる。覆土の特徴からは古代の遺構と考えられるが、出土遺物は皆無で、それぞれの帰属時期は不明である。



SI-3セクション (SP-A~A'・B~B')

1. 暗褐色土 ローム粒をやや多量、ロームブロック (φ1cm) と焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒をやや多量、ロームブロック (φ1cm) と焼土ブロック (φ5mm) を少量含む。焼土の含有量は1層より少ない。
3. 暗褐色土 ローム粒を微量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒~ロームブロック (φ5mm) をやや多量、焼土ブロック (φ5mm) を少量含む。
5. 暗褐色土 (暗め) ローム粒~ロームブロック (φ1cm) と焼土ブロック (φ5mm) を少量含む。
6. 暗褐色土 ロームブロック (不整形) をまばらに含む。
7. 暗褐色土 ローム粒をやや多量、焼土粒を微量含む。
8. 暗褐色土 (暗め) ロームブロック (φ5mm以下) をやや多量含む。
- 9a. 暗黄褐色土 ロームブロックを極めて多量含む。締り強い。床面は硬化やや強い。(掘方)
- 9b. 9a層に似るが、φ5mm程度の焼土ブロックをやや多量含む。(掘方)
- 9c. 9a層に似るが、ロームブロックの含有量がさらに多い。微量の焼土粒を含む。(掘方)

SX-2セクション (SP-B~B')

10. 暗灰褐色土 碎石含む。攪乱。
11. 暗灰褐色土 白色軽石を少量、鉄分凝集ブロックをやや多量含む。やや砂質。
12. 暗灰褐色土 白色軽石を微量、ロームブロック (φ2cm程) をやや多量含む。締り強い。やや砂質。
13. 暗灰褐色土 白色軽石を少量、焼土粒とロームブロックを微量含む。やや砂質。
14. 暗灰褐色土 白色軽石を少量、焼土粒を微量含む。砂質。13層に似る。
15. 暗灰褐色土 白色軽石を少量、焼土粒を微量含む。14層よりも砂質度が弱い。
16. 暗灰褐色土 白色軽石を少量、焼土粒と炭化物粒を微量含む。砂質。
17. 灰褐色土 白色軽石をやや多量、焼土粒を微量含む。砂質。
18. 灰褐色土 白色軽石を含まない。ローム粒を少量含む。全層中で最も砂質。
19. 暗灰褐色土 白色軽石を少量含む。やや砂質。
20. 暗灰褐色土 (暗め) 白色軽石とローム粒と焼土粒と炭化物粒を微量含む。やや砂質。
21. 暗灰褐色土 (暗め) 白色軽石を少量、ロームブロック (φ1cm以下) をまばらにやや多量含む。やや砂質。
22. 暗褐色土 ロームブロック (φ5mm~2cm) を多量含む。SI-3の掘り方の残痕か。

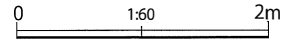
SI-3貯蔵穴残痕セクション

1. 暗褐色土 ロームブロック (不整形) をやや多量含む。焼土粒を微量含む。

基本土層

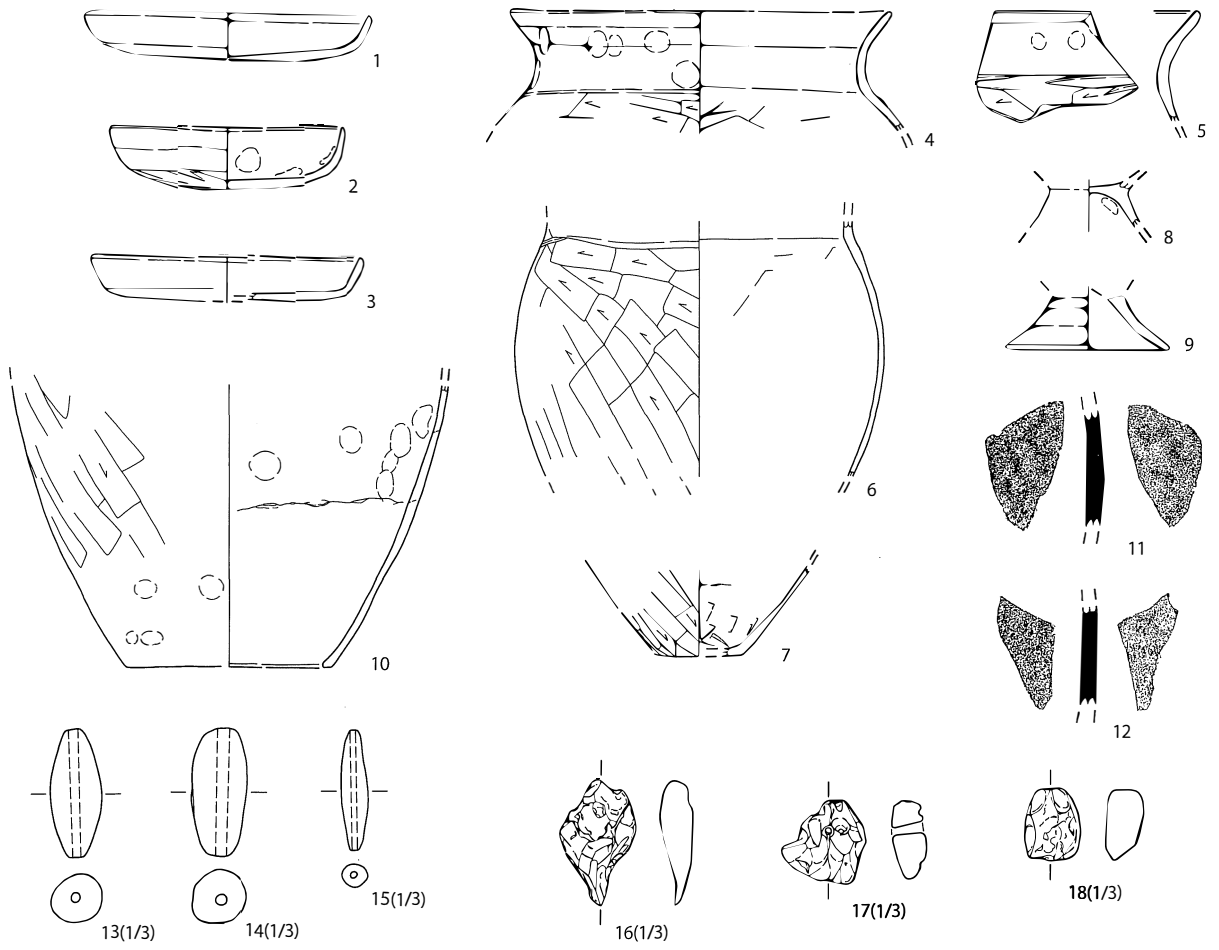
1. 10YR4/1 褐灰色土 碎石・礫を大量含む。造成土。
2. 7.5YR4/4 褐色土 ローム。粘性強い。遺構確認面。
3. 7.5YR5/6 明褐色土 ローム。粘性強い。2層より締まる。

※白色軽石はAs-Aか。砂質の覆土はAs-B含有によるものか。
 ※全層的に、にぶい黒褐色土ブロックが含まれる。
 ※19・20・21層がSX-2に伴うか不明。遺物の出土は極端に少ないが、覆土はそれより上層の土に似る。

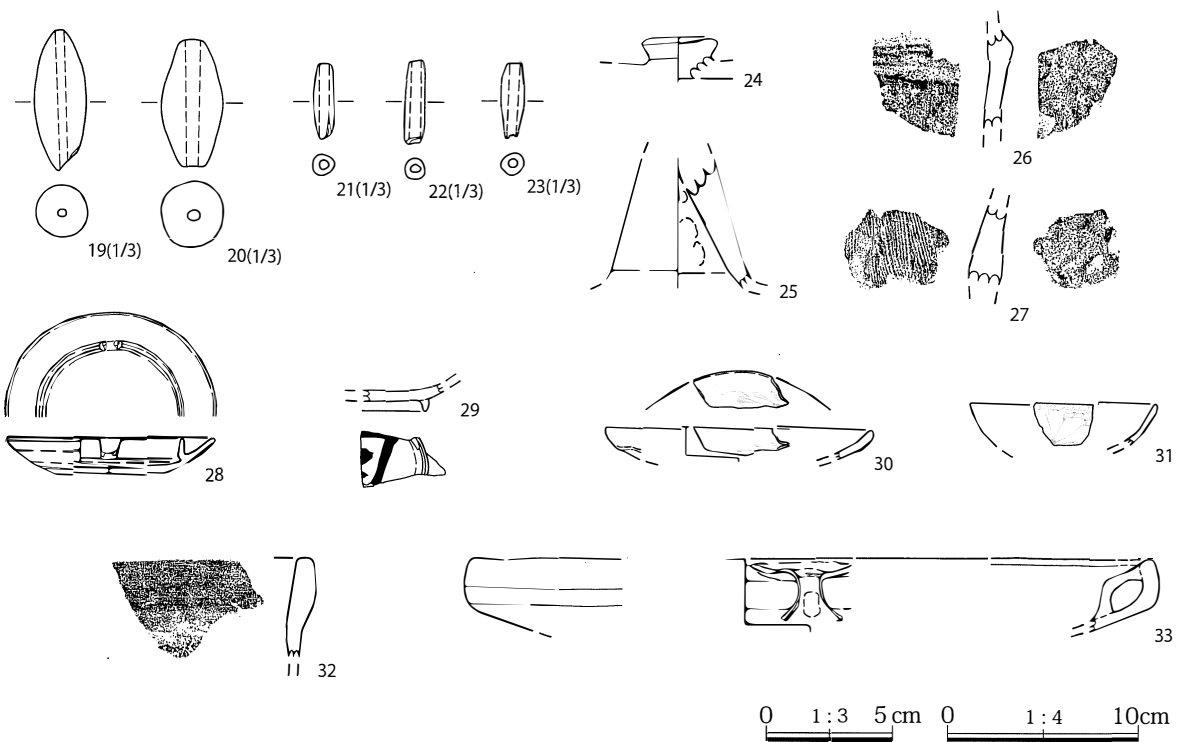


第3図 遺構平面図・断面図・基本土層柱状図

SI-3



SX-2



0 1:3 5cm 0 1:4 10cm

第 4 图 出土遺物图

第1表 出土遺物観察表

SI-3

※法量の単位はセンチメートル。() は復元値、[] は残存値をあらわす。

番号	種別・器種	出土位置	法量			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	残存状況
			口径	底径	器高					
1	土師器 坏	SI-3 覆土下層	15.0	13.8	2.7	緻密	やや良好	橙色	底部は平底で、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁部横ナデ。内面：ユビナデ。外面：底部ヘラケズリ。	3/4 残
2	土師器 坏	SI-3 覆土壁際	12.2	10.6	3.5	緻密	良好	橙色	底部は平底気味で、口縁部はわずかに外反して立ち上る。口縁部横ナデ。内面：ユビナデ。外面：体部下半無調整。底部ヘラケズリ。	1/2 残
3	土師器 坏	SI-3 覆土	(14.1)	(12.7)	2.3	緻密	良好	橙色	底部は平底で、口縁部はわずかに外反して立ち上がる。口縁部横ナデ。内面ユビナデ、指頭痕あり。外面：底部ヘラケズリ。	1/4 残
4	土師器 甕	SI-3 覆土	(20.0)	—	(6.6)	緻密	良好	橙色	頸部は「コ」字状に屈曲する。口縁部横ナデ。内面：ヘラナデ。外面：頸部横ナデ、ユビオサエ。体部横斜位ヘラケズリ。	口縁部 1/4 残
5	土師器 甕	SI-3 覆土下層	—	—	(5.8)	やや緻密	良好	橙色	頸部はゆるい「く」字状に屈曲する。口縁部横ナデ。内面：ナデ。外面：体部ヘラケズリ。頸部にヘラ痕あり。	口縁部破片
6	土師器 甕	SI-3 覆土壁際	—	—	(15.0)	緻密	良好	橙色	頸部は「コ」字状に屈曲すると思われるが、欠損のため不明。内面：ヘラナデ。外面：頸部横ナデ。体部斜位ヘラケズリ。	頸～体部上半 1/4 残
7	土師器 甕	SI-3 覆土	—	(4.6)	(4.9)	緻密	良好	にぶい褐色	内面：ヘラナデ。外面：体部・底部ヘラケズリ。Na 6 と同一個体か。	底部破片
8	土師器 台付甕	SI-3 覆土	—	—	(2.8)	やや緻密	やや良好	橙色	内外面：横ナデ。	脚部破片
9	土師器 台付甕	SI-3 覆土	—	8.4	(3.1)	緻密	良好	暗赤褐色	内外面：横ナデ。本体接合部の剥離。	脚部破片
10	土師器 甕	SI-3 覆土壁際	—	(10.8)	(15.0)	やや緻密	やや不良	明赤褐色	内面：ユビナデ、ユビオサエ。外面：縦斜位ヘラケズリ。底部面取り、単孔。	体部下半 1/4 残
11	須恵器 甕	SI-3 覆土	—	—	(6.1)	緻密	良好	灰色	内外面：ナデ。Na 12 と同一個体か。	体部破片
12	須恵器 甕	SI-3 覆土	—	—	(5.2)	緻密	良好	灰色	内外面：ナデ。Na 11 と同一個体か。	体部破片
番号	種別・器種	出土位置	法量			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	残存状況
			長さ	幅	厚さ					
13	土鍾	SI-3 床面	5.1	2.0	1.9	緻密	やや不良	にぶい褐色	手捏ね。外面ナデ。重さ：16.2g	完形
14	土鍾	SI-3 覆土	5.1	2.1	2.1	やや緻密	やや良好	にぶい褐色	手捏ね。外面ナデ。重さ：19.4g	完形
15	土鍾	SI-3 覆土	4.8	1.0	0.9	緻密	良好	にぶい赤褐色	手捏ね。外面ナデ。重さ 4.6g	ほぼ完形
16	粘土塊	SI-3 覆土	5.0	3.0	1.3	緻密	やや良好	褐色	不整形。一部に指紋が残る。重さ：10.5g	完形
17	粘土塊	SI-3 覆土	3.3	3.3	1.3	緻密	やや良好	褐色	不整形。直線的に貫通する円孔あり。重さ：11.0g	完形
18	粘土塊	SI-3 覆土	2.9	2.2	1.5	緻密	やや良好	褐色	不整形。重さ：8.8g	完形

SX-2

番号	種別・器種	出土位置	法量			法量	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	残存状況
			長さ	幅	厚さ					
19	土鍾	SX-2 覆土上層	5.5	2.0	2.1	やや緻密	やや良好	にぶい褐色	手捏ね。外面ナデ。重さ：18.8g	ほぼ完形
20	土鍾	SX-2 覆土上層	5.0	2.4	2.6	やや粗雑	良好	明赤褐色	手捏ね。外面ナデ。重さ：28.7g	完形
21	土鍾	SX-2 覆土上層	3.0	0.8	0.8	やや緻密	やや良好	にぶい褐色	手捏ね。外面ナデ。重さ 1.7g	ほぼ完形
22	土鍾	SX-2 覆土上層	3.4	0.8	0.8	やや緻密	やや不良	褐灰色	手捏ね。外面ナデ。重さ 2.0g	ほぼ完形
23	土鍾	SX-2 覆土上層	3.0	0.9	0.9	緻密	やや不良	にぶい黄褐色	手捏ね。外面ナデ。重さ 2.3g	ほぼ完形
番号	種別・器種	出土位置	法量			胎土	焼成	色調	成・整形の特徴、調整の方法	残存状況
			口径	底径	器高					
24	土師器？ 蓋	SX-2 覆土上層	—	—	(2.2)	緻密	やや不良	褐色	酸化焰焼成。ロクロ整形？	ツマミ部破片
25	土師器 高坏	SX-2 覆土上層	—	—	(6.9)	緻密	やや良好	赤褐色	内外面：ナデ。	脚部破片
26	埴輪	SX-2 覆土上層	—	—	(5.1)	緻密	やや不良	褐色	外面突起あり。磨滅のため調整不明。	体部破片
27	埴輪	SX-2 覆土上層	—	—	(4.2)	やや粗雑	良好	赤褐色	外面タテハケ。	体部破片
28	陶器 灯明受皿	SX-2 覆土上層	11.1	5.8	1.9	緻密	良好	暗赤褐色	ロクロ整形。左回転か。底部回転ヘラ調整。受けは口縁部よりわずかに低く、開口部は方形に切り込む。受け端部と外面に重ね焼き痕あり。内外面鉄釉。瀬戸美濃か。	完形
29	陶器 皿	SX-2 覆土下層	—	(3.0)	(1.5)	緻密	良好	淡黄色	内面：見込みに釉薬掛かる。灰釉か。外面：露胎。底部高台内に墨書あり。判断不明。	底部破片
30	陶器 染付・皿	SX-2 覆土上層	(14.0)	—	(1.6)	やや緻密	やや良好	灰白色	陶胎染付か。呉須絵付け。釉薬はほのかに青味のある黄白色で、貫入が多い。外面に露胎部分がある。瀬戸美濃か。	口縁部破片
31	磁器 染付・丸碗	SX-2 覆土	(9.7)	—	(2.2)	緻密	良好	白色	呉須絵付け。瀬戸美濃か。	口縁部破片
32	在地産土器 焙烙	SX-2 覆土上層	—	—	(5.2)	やや粗雑	やや良好	黒褐色	口縁部は直立し、外面体部へは緩い段になる。口縁部横ナデ。	口縁部破片
33	在地産土器 焙烙	SX-2 覆土上層	(35.2)	—	(3.8)	やや緻密	やや良好	暗赤褐色	口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部横ナデ。内耳貼り付け。	口縁部 1/8 残

V. まとめ

1. 古墳～平安時代の集落について

城山遺跡は本庄台地の北側縁辺部に占地し、これまでに2ヶ所で発掘調査が実施された。平成元年度から同2年度にかけての本庄市役所建設に伴う調査は、平成22年度に『本庄城跡』として報告されている(太田2011)。さらに平成16年度には寺院本堂建設に伴い調査がなされ、平成17年度に『城山遺跡』として報告された(山本2005)。今回の調査はこれらに続くものである。

本庄城跡では竪穴住居跡が199軒検出され、古墳時代中期の和泉式期から平安時代にかけての時期とされる。竪穴住居跡の多くが重複状態にあり、11,380㎡に及ぶ調査区内での濃密な分布状況が判明している。一方で城山遺跡第1地点はここから南に200mほど離れ、調査面積が305㎡と小規模なものの、古墳時代中期和泉式期の竪穴住居跡が2軒調査されている。本庄城跡の報告書ではこうした集落の分布範囲についてふれられており、本庄城跡の西隣の本庄15号遺跡も同一集落と考えられるという。

今回調査した城山遺跡第2地点は、本庄城跡の南約180m、第1地点の北西約40mに位置し、平安時代の竪穴住居跡を1軒検出した。第1地点の調査成果により、古墳時代中期の集落範囲は、本庄城跡からみて南側へと展開することが明らかになっていたが、今回の調査により、平安時代においても同様の展開であることがわかった。各調査地点での遺構密度は本庄城跡が最も濃く、調査面積の大小は考慮されようが、第1・2地点の遺構密度は比較的薄い印象を受ける。そうであれば第1・2地点付近は集落の周辺部分に近いことも予測され、城山遺跡の集落範囲は、埋没谷などによる地形的制約を受けていた可能性があろう。調査地点の南側には、近年まで「久城堀」と呼ばれる谷地形が存在していたことが知られている。

なお、城山遺跡からは土錘が多く出土することが指摘されており、今回の調査でもその傾向を追認した。本庄城跡で136点、第1地点で1点の出土が報告されており、今回出土の8点を併せると、合計145点になる。

2. 本庄城跡について

本庄城は中世後期と近世初期の2時期があると考えられており、それぞれ前期本庄城、後期本庄城と呼ばれる。前期から後期へはその築城地が移動したと推定され、城山遺跡は後期本庄城の比定地に相当する。本庄城跡の調査では後期本庄城の実態解明が期待されたが、関連遺構の検出は多くなかった。さらに第1地点でも関連遺構は検出されていない。

今回の調査では当初、SX-2が後期本庄城に関わる遺構の可能性を想定した。これは調査地点と円心寺の間にある路地が後期本庄城の堀の痕跡を留めているのではないかと考えたことによる。しかし調査結果としては、SX-2を後期本庄城に位置付けることはできなかった。SX-2の全容・性格は不明であるが、出土遺物の年代観からは近・現代にかけて埋没した掘り込みと考えられる。

以上のように、今回の調査でも城郭関連の遺構は検出されず、後期本庄城の実態解明は課題として残された。

【参考文献】

- 柴崎 起三雄 2005 「ふるさとの歴史・本庄」『群馬歴史散歩』第191号 群馬歴史散歩の会
太田 博之 2011 『本庄城跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第25集 本庄市教育委員会
福島 興巖 1986 「本庄城跡に関する一考察—その後—」『紀要』創刊号 本庄市立歴史民俗資料館
本庄市史編集室 1986 『本庄市史』通史編I 本庄市
本庄市史編集室 1976 『本庄市史』資料編 本庄市
山本 千春 2005 『城山遺跡』本庄市遺跡調査会報告第12集 本庄市遺跡調査会



調査区全景（南から）



調査区全景（南から／奥に本庄市役所）



SI-3 全景（西から）



SI-3 土層断面（南西から）



SI-3 遺物出土状況（西から）



SI-3 遺物出土状況（北東から）



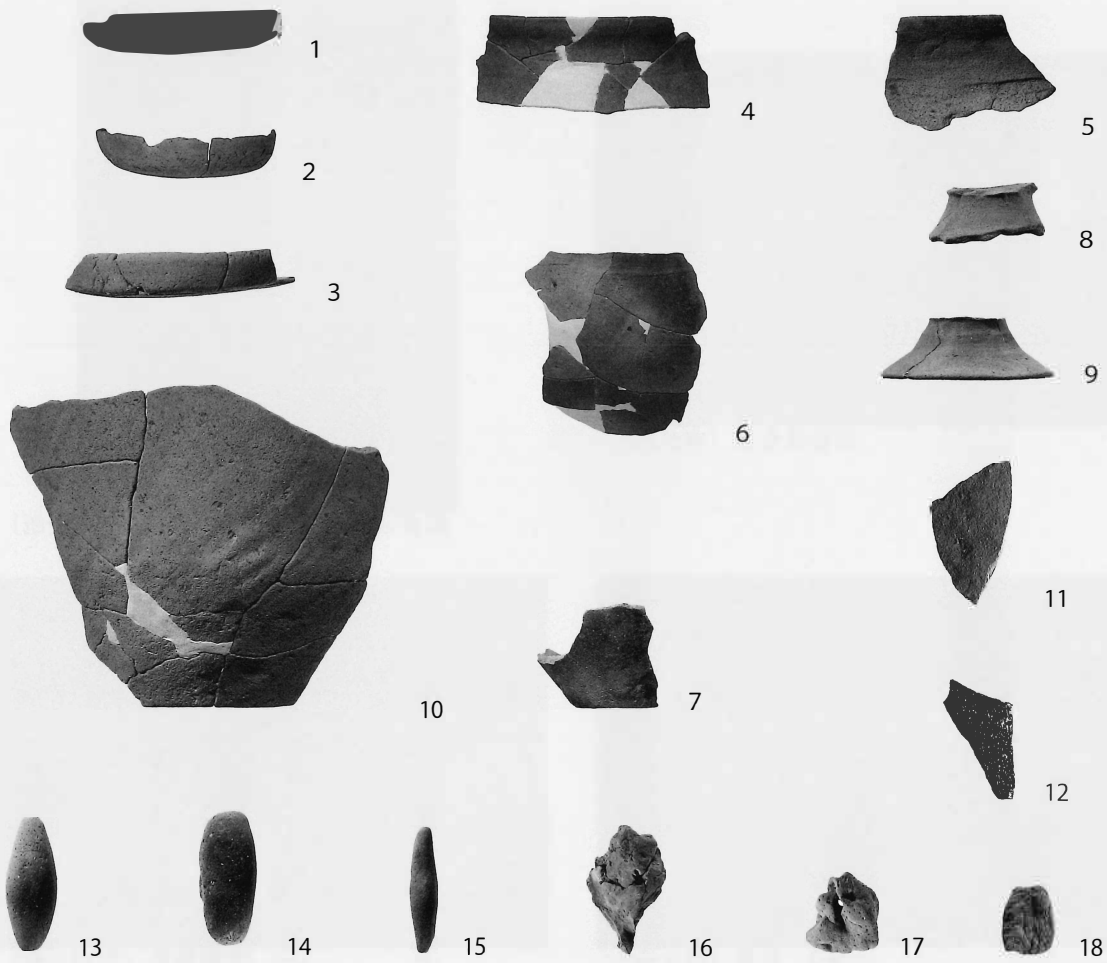
発掘作業状況（西から／奥に円心寺本堂）



整理作業状況

写真图版 2

SI-3



SX-2



報告書抄録

ふりがな	しろやまいせきⅡ							
書名	城山遺跡Ⅱ							
副書名	第2地点の調査							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	水谷貴之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	西暦2012年(平成24年)3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろやまいせき 城山遺跡	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 ほんじょう3ちようめ 本庄3丁目1603 ばんち 番地22	112119	53-159	36° 14' 31" (世界測地系)	139° 11' 24" (世界測地系)	2011.07.04 ～2011.07.21	42.1㎡	分譲宅地 造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
城山遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡1軒 ピット		土師器 須恵器 土錘 埴輪	平安時代集落の一部を調査した。竪穴住居跡は、近現代の性格不明遺構によって損なわれる。		

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第30集

城山遺跡Ⅱ

－第2地点の調査－

平成24年3月1日 印刷

平成24年3月9日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／上毎印刷工業株式会社